分担研究報告書

秋田大学での「重度嗅覚障害を呈するパーキンソン病を対象としたドネペジルの予後改善効果に関する研究」の状況

研究分担者：菅原　正伯[1)]
研究協力者：鎌田　幸子[2)]、大川　聡[3)]、三瓶　結[1)]

１）秋田大学医学部附属病院　神経内科
２）秋田大学医学教育部
３）秋田大学医学部循環型医療教育システム学講座

研究要旨
「重度嗅覚障害を呈するパーキンソン病を対象としたドネペジルの予後改善効果に関する研究」の研究計画書に従って、エントリー症例の診療を継続している。３例の診療を継続中。継続の障害となる AE はなく、認知症発症例はいない。

A：研究目的

認知症発症リスクを嗅覚低下でスクリーニングし、塩酸ドネペジルで治療介入することにより認知症発症を抑止し、パーキンソン病（PD）患者の予後を改善しうるかを検討する。

B：研究方法

「重度嗅覚障害を呈するパーキンソン病を対象としたドネペジルの予後改善効果に関する研究」の研究計画書に従った。

（倫理面への配慮）

秋田大学大学院医学系研究科・医学部倫理委員会（研究審査委員会）で承認を得ている（申請番号 1017）。

C：研究結果

1 名で文書同意が得られなかった。３名がプロトコルに従って、治療研究を継続中。継続に支障をきたす有害事象は生じていない。認知症の発症に至ったケースはない。同意を得ることのできなかったケースは背景に抑うつが存在していた。のちに認知症が疑われ脳血流シンチを施行。Alzheimer 病（AD）パターンの血流低下を認めた。

H26 年度に見守りゲイトを購入。振戦増悪例に対する定量化に用いる予定であったが、振戦増悪例は存在しなかった。PD 患者の歩行障害の検討の前に、脊髄小脳変性症患者の歩行解析を試みている。

D：考察

嗅覚低下は AD 発症のマーカーとしても有用であるとされている。嗅覚低下を示す PD 患者の PET による検討では、前頭葉、後頭葉

分担研究報告書

のグルコース代謝の低下が示されている。認知症を発症する PD が DLB、AD の血流低下パターンをとるのか、またはそれ以外のパターンをとるのか、治療研究中の３例においても検討する。また、抑うつと認知症発症との関連も検討を要する。

E：結論

研究計画に従って 3 症例の経過を追跡中。

F：健康危険情報

なし

G：研究発表

１：論文発表

なし

２：学会発表

なし

H：知的所有権の取得状況（予定を含む）

１：特許取得

なし

２：実用新案登録

なし

３：その他